

## パリ服装生地国際見本市「プルミエール・ヴィジョン」について

### －「中小企業地域資源活用プログラム（中小企業庁）」を活用した結城紬産地企業の出展－

地場産業の活性化に向け、国の政策を有効に活用しつつ新たな市場を海外に求めてパリの国際見本市に出展した「結城紬」産地企業の状況を報告します。

具体的には、2011年9月20日から22日の3日間に「パリ ノール ヴィルパンテ (Paris Nord Villepinte) 見本市会場」で開催された世界最大級とされる服装生地の国際見本市「プルミエール・ヴィジョン (Première Vision)」に出展した結城紬産地企業の報告です。

### プルミエール・ヴィジョン (Première Vision)

「プルミエール・ヴィジョン※<sup>1</sup>」は、毎年2月と9月にパリで開催されています。同会場では「ズーム・バイ・ファテックス (ZOOM BY FATEX) =アパレル関係」、「モード・アモン (MODE AMONT) =服飾資材関係」、「ル・キューール・ア・パリ (LE CUIR A PARIS) =皮革関係」などの展示会も合わせて開催される世界最大級の服装生地の総合国際見本市で、毎年、世界各国からトップブランドのバイヤーなど約5万人が訪れるとされています。



### メゾン・ド・エクセプション (MAISON D'EXCEPTION)

今回の展示会から、この「プルミエール・ヴィジョン」に、「メゾン・ド・エクセプション (MAISON D'EXCEPTION)」という新たなプロジェクトが生まれ、奥順株式会社が出展要請を受けました。このプロジェクトは、世界に埋もれている職人技を要する布や伝統的な工芸品と世界的なファッションブランドとのマッチングによる新たな付加価値の創造を期待するもので、入場は招待制です。

今回、主催者側から招聘された業者は13社で、国別ではフランス7社、日本3社、イタリア2社、ベルギー1社。日本からの出展は、「結城紬」の他、「牛首紬」(石川県白山市)、「藤布」(京都府京丹後市)です。報告者は、地元自治体の要請を受け、「メゾン・ド・エクセプション」の取材を行いました。「プルミエール・ヴィジョン」会場に足を運んだところ、会場内の片隅に周囲からは中を窺うことのできない壁で覆われた一角、それが「メゾン・ド・エクセプション」の会場でした。



※1 プルミエール・ヴィジョン (Première Vision)

<http://www.premierevision.com/>

<http://www.premierevision.jp/>

## 結城紬産地企業ブース

同社のブースは、「メゾン・ド・エクセプション」の入口から正面に位置し、国の重要無形文化財の指定要件である「手つむぎ<sup>※2</sup>」と「地機（じばた）織り<sup>※3</sup>」を実演するとともに、結城紬の反物（従来からの着物用のもので生地幅約 35cm）の他、同社が全国で初めて取り組んでいる幅広生地（70～85cm 幅）の見本の展示と商談コーナーが用意されていました。来場者には、今回作成した結城紬の小冊子（日本語・英語解説付き）と「真綿<sup>※4</sup>」のサンプル（英語解説付き）を手渡ししながらの説明と商談が行われていました。

ブースにて同社の奥澤武治専務取締役に今回の出展の経緯と状況についてお話を伺いました。

お話によれば、かねてより結城紬の新たな用途の開拓に向けて日本国内で開催される展示会を精力的に見て回っている中、2年前の東京国際フォーラムで開かれた展示会場において、プルミエール・ヴィジョン日本事務所の仲介により、同会場を訪れていたプルミエール・ヴィジョンのオーナーと会い結城紬について説明する機会を得たとのこと。その後、今年2月になってオーナーから結城紬の産地見学のためぜひ訪問したいとの電話連絡があり、伝統的に手作業で繭から生地が完成する一連の工程を見学したオーナーからは「感動した。トップブランドのバイヤーは見たことのない世界中に埋もれた伝統的な織物を探している。」とのコメントを得たとのこと。この時点でもしやと思っていたところ、5月20日頃に「プルミエール・ヴィジョン」の「メゾン・ド・エクセプション」への出展要請があったとのこと。

要請を受け、結城紬を世界中に広めたいという強い思いから短期間で出展の意思決定をし準備が進められました。準備の過程で苦労された点としては、前述の結城紬の小冊子を写真のみプロカメラマンと県の公設試験研究機関（繊維工業指導所）の手を借りた以外はすべて手作りで対応したこと、会場での実演交渉とのこと。特にこの実演に関しては、1メートル当たり数万円する結城紬について、単に製品のみでの展示ではその良さを伝えられないとの思いから主催者側と交渉を重ねて実現したとのこと。事実、「メゾン・ド・エクセプション」会場で実演を



※2 「手つむぎ」 ※3 「地機（じばた）織り」 本場結城紬卸商協同組合ホームページを参照のこと  
(<http://www.honba-yukitumugi.or.jp/yukitumugi.html>)

※4 「真綿」 繭を重曹で煮て一粒ごとに手で広げ、5～6枚重ねて作られた袋状のもの。現在は福島県伊達市一帯で作られたものを仕入れている。

していたのは1社のみで、多くの来訪者を集め、興味深そうな目で眺め、真剣な目で質問している様子が印象的でした。一方、実現できなかった点としては、昨年11月に結城紬がユネスコ無形文化遺産に登録された際の登録証の掲出であったようです。これはブース内の出展者間の差別化を避けるという主催者側の強い意志であったようです。

会期の半ば段階で、パンフレット100部が既に配布され、サンプルの送付希望も多く寄せられているとのことで、お話を伺っている際にも商談コーナーにバイヤーが訪れていました。

## 産地の状況と産地企業のこれまでの取組み

結城紬は、茨城県と栃木県にまたがる鬼怒川沿い約20kmの地域を産地とする伝統的な絹織物産業で、茨城県では結城市を中心に筑西市、下妻市、八千代町、栃木県では小山市を中心に下野市、二宮町の広範囲に散在し、現在でも大部分が農家の副業として織られています。両県で50%ずつを占め、年間約2,000反が生産されています（本場結城紬卸商協同組合ホームページより）。この生産反数は昭和55年のピーク時31,000反の10分の1以下となっています。1,000年以上の歴史を有し、昭和31年に国の重要無形文化財の指定、昭和52年に国の伝統的工芸品の指定、さらに平成22年にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の無形文化遺産に登録された産地は、今、担い手の高齢化、後継者不足など厳しい状況に置かれています。

こうした中、創業100年を超える同社では、平成21年に「中小企業地域資源活用プログラム<sup>※5</sup>」（中小企業庁）による「地域産業資源活用事業計画」の認定を受け、結城紬の特性と技術を生かした高級ホームウェア及びインテリア用品等の新商品開発と販路の拡大を目指して様々な取組みが進められています。今回の出展についても、主催者のオーナーによる産地視察の段階で、もしやという予想から、平成23年度事業計画（中小企業庁・地域資源活用新事業展開支援事業）に今回の海外展開の内容も盛り込み、国の事業採択を受けたとのこと。その意味で今回の予想が的中した、このチャンスを絶対に生かしていくとの発言に強く魅かれました。

## 今後の展開

奥澤専務のお話によれば、1反100万円以上の価格である結城紬の売れ行き減少と産地全体の縮小傾向に歯止めをかけ、新たなニーズと販路の開拓のために、例えば洋服の素材など多用途に活用できるよう幅広の生地製作に取り組んでこられたとのこと。

今後は、まずは今回の出展を通じて得た情報をデータベース化し、社内で優先順位を付したうえでアプローチしていくとのこと。結城紬の産地全体の振興の必要性とそのために取り組むという強い意志が伝わってきました。今回の取材に当たり協力いただいた奥順株式会社の皆様に感謝申し上げます。

当事務所では、地方自治体による海外での経済活動の支援に生かすため、今後も国や地方自治体の支援策等を有効に活用しつつ、当地で展開される様々な取組みの視察を通じて情報の蓄積を進め、情報発信を図ってまいります。

---

※5 「中小企業地域資源活用プログラム」

地域の中小企業が有望な地域資源（農林水産物、産地の職人の技、観光資源等）を活用して行う新たな事業展開に対して各種の支援措置が用意されている。

【参照ホームページ】

奥順株式会社

<http://www.okujun.co.jp/>

本場結城紬卸商協同組合

<http://www.okujun.co.jp/>

【参照資料】

「結城紬の現状と課題」(筑波銀行調査情報(2011年4月号))

[http://www.tsukubabank.co.jp/corporate/info/search/pdf/201103\\_5.pdf](http://www.tsukubabank.co.jp/corporate/info/search/pdf/201103_5.pdf)

2011年10月1日

クリアパリ事務所 次長

関 清一(茨城県派遣)